

2006.7.29

淀川水系流域委員会様
宇治市菟道 山岡久和

天ヶ瀬ダム再開発並びに宇治川改修についての意見

天ヶ瀬ダム再開発事業について

結局、天ヶ瀬ダム再開発は、琵琶湖の浸水被害の軽減以外に説得力のある説明は見当たりません。

付随的効果としては、確かに淀川、宇治川の洪水調節の効果はあります。しかし、京都府の新規利水の確保は、すでに暫定水利権の活用からしてあまり意味がなく疑問です。

これらを目的にして世界に類のない既設ダム本体に新しく穴を開けて1,500トンを流す計画(案)については、私は、ダム本体のみならず、エプロン等の改良も含めて沢山の問題があるのではないかと思います。

たとえ、ダムの中間部分から1,500トンが技術的に流すことが可能であると言う結論に至っても、既設のダムを運転しながら、既設のダム本体に穴を空け長期間にわたって工事をするのがどれほど危険な工事であるのか説明していただきたい。洗堰の全閉ルールが守られたとしても、いつ既往最大以上の降雨があるかもしれない最近の気象状況の中で、はたして、ダム下流に住む市民の安全を絶対に確保し、工事することが可能であるのか疑問です。

更に、昭和39年完成から現在、ダム湖上流部に貯まった土砂等は、当初計画どおりらしいが、すでに60数パーセントと聞いておりますが、これが、1,500トン放流になれば、瀬田川の流量を増やすことにより、琵琶湖南湖に貯まっているヘドロや悪水等とともに瀬田川を流下して天ヶ瀬ダム湖に流れ込みます。さらに、ダム湖の流速・流量が増加し、動的平衡状態がくずれ、ダム湖上流部に貯まってある多くの土砂やヘドロ等がダム湖に流れ込み、より天ヶ瀬ダムに近づくことになるのではありませんか。ましてや、大戸川ダムの建設を中止した現状、大戸川からの土砂等の流出や今でもダム湖の上流部には、沢山の土砂とヘドロ等が貯まっているので結果として、ダムの寿命を縮めることになり、天ヶ瀬ダムも遠くない将来に巨大な廃棄物といわれてしまうのではないのでしょうか。

これを回避するためにダム湖に貯まった土砂とヘドロを、排砂口を設けて下流に流すことになりますが、土砂だけが流れればよいのですが、ヘドロ等の不純物を流せば下流域の宇治川、淀川、大阪湾の環境を悪化させることになります。だからと言って水を汚さずに土砂とヘドロの分別を

しょうとすれば、高額な費用と時間が必要になります。多くの犠牲の上に作られた天ヶ瀬ダムを出来るだけ長く利用することが、費用対効果の視点から大切なことではありませんか。

普通は、ダムの能力のアップによる土砂の移動に伴う堆砂対策であります排砂口の検討が、誰が見ても問題を回避するためとしか思えない排砂施設と天ヶ瀬ダム再開発事業を切り離して、単独の排砂施設として検討されるらしいですが、土砂移動の連続性を確保するからには、必ず「環境の保全」に十分な検討をされることと、将来に禍根を残さないような方法で実現されることをお願いします。

もう一つは、天ヶ瀬ダムの現状についてこのたび志津川区において、はじめて現状のダムが出している「低周波音・振動」について調査を始められることになりましたが、現状の天ヶ瀬ダムで起きている「低周波空気振動」をご存知ですか。昭和44年当時、天ヶ瀬ダムより570トン～760トンが放流されていたと新聞報道されていますが、近接する靖国寺では屋根瓦が落ち、本堂の位牌が一人で散歩するほどの振動があったようですが、当時の建設省は、「空気振動で心配するに至らない」と取り合ってもくれなかったと掲載されています。しかし、今回の放流でも「低周波空気振動」は生じております。(余談ですが、昭和44年7月11日には900トン放流を行い、更に950トン放流をしたい旨を電話で宇治市長に通知して、拒否されたことが報じられています。)

昭和44年に靖国寺に起こった「低周波空気振動」の問題は、一部、保障工事をしたからとしても、今日に至っても解決されていません。

また、ダムがあることによって、魚類等の生態系が分断されている実態については、基礎案環境—3-11で述べられていますように、「天ヶ瀬ダム魚类等遡上・降下影響評価検討委員会」で平成17年度も検討されてはいますが、宇治川の釣り人たちはあきらかに魚類の減少を実感していますが、現在までのところ何一つ改善されていないのではありませんか。また、降下ルートの一つとしてダムのコンジットゲートから魚類が落ちて「何割かの生存が確認されていた。」と言われていますが今回、天ヶ瀬ダムの800トン前後の放流は、エプロンの中は勿論、白紅橋下流まで渦巻いて真白にあわ立っていました。はたして生存があるのか疑問です。検討委員会の結論がより良いものでありますように期待します。(余談・白川浜に施工されましたフトン籠の現状は、目視ではありますが、ごみが引っかけり四角いので違和感があり大変苦しいものであります。その上、漁礁にもならず、ナカセコカワニナも付着生息しているようには見えません。河床の安定のためならほかの方法を検討されてはいかがですか。)

また、宇治川の水質は、天ヶ瀬ダムによる貯留による水質の悪化が問題ですが、水源地であります琵琶湖の水質の悪化がもっと問題であります。さらに琵琶湖に流入する河川からの流入水の悪化が問題であります。この流入水を琵琶湖周辺に住んで居られる方々の努力だけに任せてきた社会の仕組みを改めなければならないと思います。

琵琶湖南湖周辺の開発に伴う南湖の水質の悪化は、天ヶ瀬ダム湖で更に濃縮して宇治川を流れていきます。

琵琶湖に比べて水量の少ない宇治川は、琵琶湖南湖の水が濃縮されて、琵琶湖より激しく環境の悪化の影響を受けているのではないのでしょうか。ぜひ、調査していただきたい。

私たちは、治水、利水、環境はひとつのものとして捉え、流域は運命共同体であることを自覚して、琵琶湖から渡された水を、宇治川周辺に住むものは、宇治川の水を利用し、治めて、出来るだけ汚さないようにして下流域に住んでおられる淀川の人々や、人間以外の全ての生態系に渡さなければならないと思っています。

琵琶湖総合開発事業を25年の歳月と、1兆9千億円かけて貴重な天然湖沼の琵琶湖をダム化して完成されました結果、短期的には琵琶湖周辺に多大な恩恵をあたえました。

その上、更なる琵琶湖周辺の浸水被害の軽減のために、下流域には、「主たる目的が琵琶湖の浸水被害の軽減のための1,500トンの放流」に伴う天ヶ瀬ダム再開発事業、さらに、塔の島地区の河川改修事業が計画され、その結果、今までに行われました河川改修工事で、塔の島地域の景観破壊が著しく起きています。

この歴史的景観の保全は、宇治市民だけの問題でなく流域みんなの課題というべきものでもあります。

景観を破壊しなければ1,500トンの水量を安全に流すことができない場所があるにもかかわらず、「費用対効果」だけのために既設のダム本体に穴を空ける計画案を検討し、何が何でも塔の島地区の河床掘削等で切り抜けようとされていますが、あまりにも、「費用対効果」が優先されすぎていませんか。

このような場所は、多少の費用がかかっても出来るだけ多くの一般住民等の意見を集めて、あらゆる角度から検討を重ね、住民に説明し理解を求める努力が必要です。

その上で、最低でも将来にわたって「環境の保全」と「水害」に対しての安全が保障されなけれ

ば意味がありません。

ちなみに、今回の放流で塔の島地区に900トンが流されていますが、流域委員会の委員の皆さんは、一度でも自分の目で見ていただきましたか。この流れを見てどう感じられましたかお伺いしたい。

もう一点、環境に関する問題を検討されるときには、大方は河川管理者が選んだ専門家といわれる方々を中心とした「0000会」の意見だけで、ほとんど住民の意見を反映できるシステムがありません。これでは、いくら良い意見がだされても将来的に河川環境の共有も継承もされません。流域委員会は、住民参加部会等を設けて、一般住民の意見を聞いて反映されているように言われていますが、形だけの住民意見の尊重システムであり、これでは素人である住民の意見を羅列しているだけで、いかにして反映されているのか実感できません。

流域委員会関係のどこの会議も傍聴者のほとんどが国土交通省の職員等で占められている今のやり方に甘んじておられる委員会では、残念ながら今後も期待できません。

もう少し時間をかけて集まりやすい場所、日時、テーマ等で、説明も出来る限り分かりやすい表現で、参加者には自由に発言できる住民主体の会議もあっても良いのではありませんか。一般住民の方々は、あなた方よりは河川の現状を理論的に理解されてはいませんが、経験として一番良く知っておられます。その地元の方々の意見が反映できない会議は、私は不十分であると思います。

環境は一部の専門家といわれる方々だけのものではありません。みんなのものであります。ぜひ、出来るだけ多くの一般住民の意見が反映出来るシステムを立ち上げていただきたい。一旦失われた自然景観を元に戻すには、破壊するよりはるかに多くの時間と費用がかかります。

次に、天ヶ瀬ダムの1,500トンの放流は、琵琶湖の浸水被害の軽減のため、瀬田川を流れ、宇治川の環境を守りつつ、安全に淀川から大阪湾に注がなければなりません。そのためには、宇治川の堤防の安全性は絶対に不可欠であります。

国土交通省の従来からの「土提原則」については、今までの価値観で総合的に判断すれば、私は妥当性があると思いますが、しかし、今日では宇治川周辺の市街化はIT産業をはじめ目を見張るものがあります。万が一にも左岸堤防が決壊するようなことがあれば、宇治市は壊滅的打撃を受けるといっても過言ではありません。また、最近の気象状況を思うと、宇治川でも、いつ起こってもおかしくありません。

流域委員会が言われる「越水しても破堤しない堤防、洗掘されても破堤しない堤防、浸透して

も破堤しない堤防、更にはこれらの現象が複合的に発生しても破堤しない堤防」で、かつ、「環境の保全」がされるなら、そんな魔法のような堤防が考えられるなら、その実現のために、流域委員会が主張される「第二次淀川堤防強化検討委員会」を、ぜひとも立ち上げていただきたいし、更なる流域委員会の奮闘を心から応援するものであります。

また、緊急堤防補強区間における詳細点検の結果、宇治地域については、左岸堤防の浸透対策が4箇所だけが当面の問題にされていますが、調査結果すべてのデーターを公表していただき、同時に、長期にわたる琵琶湖の後期放流に対して本当に安全であるのか、納得させていただきたいと願うものです。